

経済学史の本質と意義

高木, 暢哉

<https://doi.org/10.15017/4403387>

出版情報 : 経済學研究. 31 (3/4), pp. 59-81, 1965-10-25. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :

経済学史の本質と意義

高 木 暢 哉

経済学史をわれわれは学ぶという。しかし考えてみると、この学ぶということが、すでに問題をはらむ。学ぶという経済学史とは、そもそもなんであるか。なんのために学ぶのか。なんのためにか学ぶとして、どのように学べばよいか。学ぶためには、学ぼうとするものの性質や構造が分っていないと、見当はずれの研究になる。ということは、経済学史とはなにかという問に、はねかえってくる。なんのために学ぶかという問とも無関係ではあるまい。こうして経済学史の本質とか意義とかをめぐって、問われてこざるをえないのである。

経済学史とはなにか、という問は、一見自明なことのように思われる。経済学についての歴史であると、ひとまず答えることができるであろう。けれども実は、同じ言葉を繰返えしただけのことではない。答にみえて、答えにはなっていない。経済学とはなにかということを、聞きただしてみなければならぬ。経済学の歴史という、その歴史ということにも、なにか格別な意味がありそうにみえる。しかもそういう経済学の歴史を学ぶということは、そもそもいつたい、どうしたことなのか。それはもともと、どのような学的思考に属するのか。経済学史は、他の種類の歴史とは区別されての経済学の歴史であった。したがってそれに特有な内容を持ち、特有な構造をそなえているはずである。そういう特有な歴史的性格・構造をもつ経済学史を学ぶとあってみれば、その場合の経済学史的思考には、これまた特有な

性格規定が備っていないということはない。経済学史的思考とはどんなものであるかという間に、つきあたる。

けれども、経済学史的思考もまた本来の経済学的思考から離れてありうるものではないであろう。その一要素、側面を形づくる。ということになって、こんどは経済学的思考とはなんであるかということが、考察されるのでなければならぬ。ここにまで間が広がってこよう。したがってまた、経済学的思考にもとづくところの経済学的知識ということも分っていなければならぬ。経済学的知識の歴史が経済学史であった。つまりは、経済学史と経済学史的思考、あるいは経済学的知識と経済学的思考などということに向けて、問いかけてみるのでなければならぬ。

一 経済学的思考と経済学史的思考

経済学自身が歴史的に生じたものであった。それは歴史的に発展し発達し、そうして経済学史がいまここにある。しかし経済学は、経済学的思考によるのであった。経済学的思考が歴史的に生じ、今日にまでおよび、現に今日において機能しているということにはかならぬ。こうして経済学史はなによりもまず経済学的思考の歴史であるということができよう。

そこでもしも、経済学史を経済学の単に時間的に並べられた歴史的系列としてのみみるならば、経済学史が本来もつところの思考の歴史的運動としての面が不当にも閑却されてしまうことになるであろう。そういう見方は、経済学史を経済学的思考そのものより引き離し、対象化し、客観化し、単に過去のものとしてのみみてしまい、いつてみれば物理的時間の線上に配置された観念の系列にすぎぬものとして捉えてしまっているからである。真実のところは、経済学的

思考が生み出す経済理論や思想の歴史的運動にほかならない。経済学的思考とは、もともと働きではないか。それは本性上能作ということだ。しかも歴史的に行なわれる働きである。そうして理論や思想が生み出される仕方がまた歴史的になる。生み出された理論や思想を足場とし、契機として、つぎつぎと新しいそれらが歴史のうちに生み出されてゆく。経済学的知識を生み出すものは、まさに経済学的思考であり、そういう経済学的思考の歴史的運動のあとに残された足跡として、軌跡として経済学知識の時間における系列が見出されうる。しかしそういう足跡や軌跡を経済学史そのものとみることはできない。そういうものを後に残しつつ運動してやまないものとして、経済学的思考の歴史的運動がある。こういう運動こそが本来のものであり、経済学史の真実といえよう。経済学とは、経済学的思考の所産であった。それは歴史的に生み出され、発展し、運動し、とりもなおさずそれが経済学的思考の歴史的な運動であり、それが経済学史であるということ以外ではあるまい。経済学は、経済学史という歴史的運動の形をとって現実的には働きをつづけ、つまりは経済学史とは、歴史的に運動し発展してやまない経済学自身のことであるということになってこよう。そういう歴史的な経済学的思考の運動を省みて検討し、吟味しようとする経済学的思考が、経済学史の思考ということになってくるであろう。経済学史の思考とは、経済学的思考の歴史的運動についての経済学的思考自身が行なう自省・反省・吟味以外ではないようだ。

ともかくもわたたくしとしては、機能・運動・能作・働き・過程としての経済学的思考や経済学史的思考などに注意を加えてみたいと思うのである。運動し機能し働くものでなければ、歴史的事であることはできない。作られた経済学、書き上げられた経済学史ではなくて、それを作る経済学的思考、それを書き上げる経済学史の思考こそが、真実である。経済学的思考の歴史的運動が経済学史であり、そういう歴史的運動を自省する経済学的思考が、経済学史の思考という

また歴史的な運動・機能・過程にほかならない。このことについては、後にいたって、ふたたび詳しく論じることになるであらう。

二 経済学的知識

経済学的思考の成果が経済学的知識であった。そういう経済学的知識の時間的歴史的系列として、経済学史は現われて出る。そこで経済学史とはなにかということについて答えるためには、この経済学的知識ということであらかじめ頭に入れておく必要がある。もとより、それを生み出す経済学的思考というものが、ここでも問題とされねばならぬことは、いうまでもないが、経済学的思考は、経済学的知識を、どのような仕方で、どのようなものとして作り出すのか。経済学的知識の形成を論題とし主題としている場合ではないので、ここでの考察に必要と思われるかぎりでの簡略なものとしなければならぬことは、いたしかたない。

経済の事実が人間の思考を経てその意識の上に秩序ある觀念の合理的体系の形をとって再現されるときに経済学的知識は成り立つ。経済学的知識はこうしてひとまず経済的事実についての秩序ある觀念上の再現であるということができよう。もちろんその再現にあたり、思考する主体のがわにあっての一定の関心などのごとき選択する働きが介入することを、看過していつているわけではないのであるが、どのような経済的事実が思考の対象に選ばれ、またそのどのような側面が、どのような角度から選ばれて思考されるかについては、思考する主体のがわにおいての価値判断のごとき

がかかりをもつ。特定の関心があり、それにそって対象が選ばれ、それにそのような対象接近への視角や態度がとられることになるのである。このようにして思考の対象が構成され、ついでも新しい関心や視野が開かれぬかぎりにおいては、思考はこうして設定された構成の枠内に止まって作業を行ない、その外に出ることはない。そういう人間の関心に方向を与えるものがなんであるかは、後に述べることになるであろう。

ともかくも、そのようにして選ばれ設定された対象の認識についていうかぎりにおいては、要するに知識は外なる事実についての観念でする再現にほかならない。もとより再現は徹底されて十分でなければならぬ。思考は忠実に完全にと、対象の観念による再現を求めてやまない。不純を排除して合理化を進め、認識における整序と組織化をはかる。つまりは事実へ事実へと、われわれの思考は、概念化の作業を追求しつづけてゆく。事実をまげた観念による再現が虚偽の知識であるとすれば、事実の全体に及ばぬそれは、不備の知識でしかない。不備な観念の体系を完全にしようと、人間の思考は不断の努力を続けてやまぬ。真偽の基準は、映し出される対象的事実のがわにある。事がらそれ自身のうちこそ真理は宿るからである。^(注一)

注一 もう少し細かくいえば、思考の対象への接近には、さまざまの操作や手段が必要とされる。ウェーバー流にいえば、理想型 (Idealtypus) のごときが、現実接近への武器として使用されざるをえない。それは主観が作り出した仮構 (Fiktion) にすぎぬが、われわれの経験するところから抽出され純粋化されて作り上げられた理念像 (Ideenbild) であって、客観的可能性 (Objective Möglichkeit) とでもいへべきであり、こういう理念像を想像力を用いて作り出し、それを手段として対象にせまる。もとより個性的で一回切りの歴史的事実が単一の理念像くらいにおさまるはずはないのであるから、つまりは対象的事実の多様性に応じ、または研究者の意図の多様性に従い、類型は無数に構成されねばならぬであらうし、さらには類型の複合化が行われねばならぬであらう。こうして、われわれの概念による把握を一步一步対象的事実へと近づけてゆくことができるのであるが、それにもかかわらず、やはり現実そのものは、人間の概念によって追求されねばならぬ究極的事実性として、概念や思考の

かなたに残る。この意味においては、真理は、かなたのものである。

それでもやはり思考は、ひとりひとりの人間の意識のうちにおいてのことであつた。そういうひとりひとりの人間は、実は社会関係においてあり、社会関係をと結び、したがって社会関係により制約され規定されざるをえないそれぞれの人間であるということについては、後において注意するが、ともかくも思考は、直接的に具体的には、有限の肉体でもって隔てられていて互いにかがいが知ることのできない個々人の意識内においてのことであることは、いたしかたない。個人という人格主体が事からに出会い、関心をもち、意味を見出し、個人の思考はそこに始まる。それぞれの個人においての出会いであり、個人においての関心であり、問題であり、個人が行なう選択、それにもとづいての対象の設定、ついでそれへの接近と思考にほかならない。なにか抽象的で一般的な意識——意識一般・普遍的主観——のごときが、まずあつてのことではなかつた。そういうものの思考が生み出す成果、すなわち知識一般というものでもない。といつて単なる個人の意識、すなわち個人主観においてのことでもない。現実に肉体をもって思考する個人主体においてのことである。個人主体が事からに出会い、個人主体が関心をもち、それぞれが選択し、対象を構成し、思考して、概念的知識にまで作り上げる。知識はまずは、そういう個人主体においてのことであることが注意される。このために理論は、本来的に、個人的名称をもつことになる。アダム・スミスの理論があり、リカアドウの理論があるというように。いいかえれば理論は、すべて個別的相対性をまぬがれない。個別的に相対的であるということが、すべて理論においての本性ということになる。

この点をもう少し立入って述べてみよう。およそ理論は個別的で相対的であることをまぬがれぬといえ、なにかしらあやふやで頼むに足りぬという感じを与える。そういえばそうには違ひなからう。古今を通じて、不動であり不易で

あつた理論のためしはなかつた。理論はそれぞれるとき、それぞれの社会に現われ、それぞれの働きをしてそれぞれの役割を終える。というのも、それぞれのとき、それぞれの社会に生活する個人主体が作り上げる個人主体としての理論であるからだ。抽象的な個人主観または意識一般がすることではない。自然的・歴史的・社会的に規定された現実の個人主体が思考を行なう。しかも個人主体が思考を行なう場所がまた自然的・歴史的・社会的に限定されていて、つまりは現実的ということである。現実的な自然的・歴史的・社会的場所ので生活実践する自然的・歴史的・社会的な現実的個人が行なう現実的な思考の成果として、現実の知識は形成される。個別的に相対的な知識であるということが、つまりはそれが現実的であるということの根拠でもある。それぞれのとき、それぞれの場所ので個人主体が行なう観念による対象の事実の個別的再現ということを離れて、理論と呼ばれるものの現実性はいえぬ。経済学史は、なかんずくそういう歴史に現われた理論の個別性の上に立たなければならぬ。個別性こそが歴史的に現実的であることの成り立つ基礎であるからだ。

けれども理論は、自閉して孤立化された独断や独善と同義でありうるはずはない。そうであることは、できぬのである。理論は理論であろうとするかぎりにおいて、普遍性や絶対性を求めざるをえない。普遍的に妥当するものとして理論は社会に提示されるばかりでなしに、それぞれの個人のもとにおいて作られるとはいいなながらも、実は社会の集団や組織などによる社会的な媒介を経る。理論は個別的に相対的であるのとまさに同じように、生れながらにして社会性をもたされる。個別的主体による個別的思考活動が、実際には、どのように行なわれているかをみるとよい。個別的主体は、同様にして個別的な他の人間主体による思考活動に出会う。出会って関係をもち、対話することを通じて、みづからが個別的で相対的であることを知らされるが、とともに、社会の一般性へと開かれる。社会的に妥当するものとして

理論は提示されることが要求される。社会の一般的承認がえられるような個別的理論でなければならぬ。ところで複数の個別的主体が関係し合い、対話する場所といえ、社会の諸集団や組織においてのことであって、もとよりそれはさまざまな種類・序次・規模のものがありうる。家族とかサークルのごときは、小さくて低序次の社会集団である。階層・階級・世代のごときは規模が大きく、地域社会および国家のごときは、範囲は広く序次は高い。そういう諸集団や組織に属する個別的人間主体が活動する分野・範囲・内容のごときは、それぞれ異なり、したがってそれぞれがもつ知見のあいだには相違があり、さらには対立・矛盾・背反のごときがありうることは、いうまでもない。相違や背反のあることこそが、むしろ当然のことであって、そこに論議が起り、対話が生まれ、ついでそういう矛盾や対立は集団組織内部にあつて主体相互のあいだで行なわれる関係交渉の過程を通じて、整序され、一般化され、最後にはそれら集団に特有な一定の觀念の形成にまで仕上げられてゆく。

家族やサークルなどのごとき小集団において早くも見出すことのできる特有の一般の見方・考え方というものがある。世代の思考・階級の意識というものが存在する。社会諸集団のあいだでも、交渉や関係はおし進められ、これを通じて思考の社会化はいっそう深まり、個別的で相対的であつたものが、より一般的なものへと転化され、そこでふみかためられ、積上げられ、さらにおし上げられてゆくことになる。個人主体においての個別的觀念でしかなかったものが、集団の組織内における、次いで集団のあいだでの関係交渉を経ることによって打ち破られ、社会的に一般的な認識にまで成熟してゆく。そのような一般化・社会化の過程に際し、個別的主体による個別的思考が実は集団の意識における結節となり核となり、また推進力となつて働くという逆関係の事実のあることは、注意される必要があろう。現実には、個別的主体による個別的理論でもつて集団における意識や觀念の一般的内容が代表されて、社会では提示をうける

からである。それは個別的相対性をまぬがれない個人主体の個別的思考による成果ではあるにしても、同時に、一般的に社会的な知識を含蓄し、個別が集団における知識や意識を代表して表明するということになっている。例えば、アダム・スミスの経済学は、産業革命に先行するマニファクチュア段階におけるイギリス資本主義の理論といわれるように。アダム・スミスと呼ばれる特定の個人主体による個別的理論でもって、その当時のイギリス資本主義においての一般的社会的意識の内容が代表して表示されているという意味である。

組織や集団に特有な一般的意識の内容は、それに所属する個別的成員の意識を社会のがわから規律する。生れながらにして個人主体はなんらかの人間集団に所属しなければならぬ社会的存在でしかないからだ。それぞれの成員における意識や観念にはそれぞれに相違がありながらも、やはり社会的人間存在であるということのゆえに、集団に特有な一般的観念を個別的成員は分ちもつ。個人主体の観念が、所属の社会集団においての一般の意識により規定され、それを反映せずにはいないという事実をいい現わすものとして、イデオロギイ (Ideologie) という概念がある。それは、社会的集団の組織を通じて形成される社会に特有な一般的な意識が、そういう社会化された意識であるがゆえに社会の面から個人主体の意識に向けておよぼす規定・作用・制約のごときを指しているものと解さるべきであって、もしも一般的意識の内容が固定化され実体化され、個人の意識内容は、単にそれが個人主観の上に投影された反映・模写・印刻にすぎぬというのがごとくに安易に理解されるならば、不充分であり、行きすぎになる。イデオロギイと呼ばれるものの真実の意味は、個人主体の観念が社会的組織を通じる社会化の過程によって否定的に媒介されて一般化される社会的意識形成の過程においての要素であり、そういう社会化の過程に参加するという事実と働きまでも、全く無視し否定し去るものであってはならない。^(注一)

注一 経済学におけるイデオロギイの性格については、次のごとき簡明な論述がある。「すべて科学や文化は、現実な地盤に対しては、人間の観念的能力によって生産される『イデオロギー(観念形態)』であり、その地盤に照応して形成・伝達・発展するとともに、その地盤の推移とともに、あるいはゆるやかに、あるいは急激に、うつりかわる。……経済学は現実的な地盤のロゴスであり、そのロゴスを追求する人間の知的生産物、イデオロギーの内に宿されて、あらわになる。地盤の客観的な真理が主体である人間の知的いとなみを通し、それに媒介されて、あらわれるのである。真理の把握は、客観の反映であるとともに、主体による構成であり、構成によって意識されたロゴスが客観的な世界に投げかえされ、現実には、主体によるロゴス的な形成のうちにくんで、現実の真相に徹底してゆく。これが歴史の展開というものにはかならない。」(出口勇蔵編『経済学史』ミネルヴァ書房、三訂増補、昭和三年、四二ページ) わたくしはここでは、現実の地盤が人間における観念の内容にまで投影されるイデオロギイを、同じ地盤に立つ社会成員において共有される一般的意識内容としてとらえ、つまりはイデオロギイを、すでに与えられているものとしてその性質や働きについて叙述する代りに、むしろその形成の仕組や過程や、またその際に働く個別的契機のごとくに力点をおいて、右において明らかにしてみたのである。

社会化され一般化された理論は、社会の成員たる個人や、また低次の社会諸集団においての観念を一般の立場から規制し、個別がよぎなくされる自閉性や孤立性から解き放つのであるが、他方では、それはやがて硬化し、固化し、生命を失い、個別的に現実的な生活体験の内容と衝突するようになることがある。こうして実体化され独善化するようになった社会的に一般的な理論は、当然に打破され、または訂正されねばならない。社会諸集団の底辺にある成員がもつ個別的体験のうちから汲み上げられる現実的エネルギーをもって、それは実現される。一般性自身がもとと成員や集団のあいだでの関係や交渉を通じてのものであった。個別的に相対的な思考が組織や集団を通じ、社会的に否定的に媒介されて一般化され、組織や集団にとっての一般の理論となる。しかし他方では、個別的主体の生活実感にもとづく個別的思考のエネルギーをもって打ち貫かれ、硬化してゆく実体化・独善化から救われる。社会的組織を通じての一般化さ

れる思考の社会的運動であるが、また一般的理論をその硬化から救い出す個別的思考の働きでもあった。こうして人間の思考活動は、社会から個別へ、また個別から社会へと向う対立・矛盾の運動を含み、それ自身弁証法的構造をとる。社会的に個別的に働く思考の弁証法であるといってもよからう。そういう構造をとっての思考の運動であればこそ、理論は生まれ直し、改められ、転化・発展してやむことがない。理論はこうして、それ自身のうちに時間を含む。それは歴史的に生成し発展する。経済学的思考もまた歴史的に運動をつづけてやむことがなく、それ自身が歴史であり、それ自身のうちに歴史をもつ。すなわち経済学史ということになる。

経済学的思考は、歴史的にはどのように現実には展開されているか。展開の方向としては、大まかに分けて、二方向を指摘することができるかと思う。intensiveとextensiveとの。思考はそれ自身の本性にもとづき、インテンシブにみずからを深めようと欲する。対話が進むという仕方では、それは深められ発展してゆく。同時代との対話ばかりではなく、過去の学説との対話を通じ、また未来とのあいだの対話によって。未来もまた現在に話しかけてくるものだ。このような対話には、もとより環境的世界の事実が、基礎にはある。経済生活自身がインテンシブに深まってゆくので、経済学的思考もまた内面化されざるをえない。資本主義におけるマニユファクチュア段階からファクトリ段階への内面化された発展は、内面化されて精緻にされたスミスからリカードウへの理論の発展を生むことになった。しかもこの場合における内面化された資本主義の発展は、ファクトリ段階という一面外化された拡大を同時に含み、理論の発展もまた外化された規模での拡大を行なわざるをえない。例えば、労資の対立が明らかにされ、分配論の面においての理論の拡張が行なわれる、等々。ここはまだそういう学史的発展の事実について述べるべき場所ではないので、これ以上のことは控えねばならぬが、ともかくも歴史的に展開される経済学的思考は、インテンシブにまたエクステンシブに、また

は同時に二方向に向うものがあることを、指摘してみたまでのことなのである。

三 経済思想と経済思想史

われわれの日常生活のうちには習慣的な生活様式と密着し、それと分ちがたく浸透し特色づける特有の価値感情または価値観というものがある。特有の美意識・倫理観・人間観・社会観・宗教感情といったものが、それである。さまざまの集団や社会に特有な気分 (mood)、風俗 (mode)、風習 (mores)、習慣 (custom) のごときは、このようなものに基礎をおく。そういう価値判断の基準に導かれて、日常の生活は営まれる。もちろんそのことは、われわれにはほとんど意識されないほどに生活のうちに融けこんでおり、しかもそれにとつての指針となつて働く。日常生活においての生き方、考え方、いつてみれば生活の知恵といったものである。その解明には、深層心理学や社会学などに加えて、多元的な人間把握が必要とされるが、それはともかくとして、人間の集団生活のうちに土着し定着して、その成員のための日ごろの生活の知恵となつて働く観念がある。これを思想というならば、それぞれの集団には、それぞれに土着するそれぞれの思想というものがあつて、これにより成員の日常の意識は導かれる。もちろん個人主体においての生活体験や生活実感の内容はそれぞれ異なり、つまりは個々人のエートスといったことになるのであるが、一方、個人主体の生活実感は集団の組織を通じて汲み上げられ、引き上げられて、集団のうちに定着され、個人実感の狭さと相対性は越えられ、否定的に媒介され、組織の上に逆流し、普遍化された思想結晶となり、組織の核となつて、それに定着するという運動の弁証法的構造は、すでに述べたところと異ならない。成員たる個人は、組織と結び

つくことによつてのみみずからの生活実感を対象化し、外化しながら、自閉的に内面化されたみずからの神話を打ち破る。一方、組織に定着される社会的に一般的な思想の方は、転移し、変化し、発展する。それが思想の歴史である。

われわれの経済生活について、このことをみよう。価値諸感情はわれわれの経済生活のあらゆる分野に浸み透り、絡み合い、融け合い、それと切り離すことができない。さまざまな価値諸感情によつて影響されない日常の経済生活というものはない。生産過程においてそうであるし、消費生活がすでにそのようになされている。したがつて経済生活の事実についての認識においても、価値諸感情やそれにもとづいての価値観念の介入を完全に拒ばむことはできない。これらによる影響を全然うけない経済諸理論というものは、ないとさえいってよいくらいだ。純粹に合理的な経済理論として主張され、みずからも思い、人からも思われている見解についても、これをつぶさにみるとときには、特定の人間観・社会観のごときが暗黙に措定されている場合が少なくない。例えば経済人 (homo economicus) という理念型があり、それを考察の手段に用いて近代の合理的経済理論は組立てられている。経済人というのは、経済的利益のおもむくところを合理的に算定して行動する合理的人間のことをいうのであるが、近代資本主義にいたつて広く社会のうちに根を下ろし、この経済体制と合体し、それをみずからの肉体とすることに於いて確立され承認をうけるようになった人間についての新しい理念にほかならない。中世における人間像は、これとは違い、宗教的人間を典型とする。宗教が設定する価値基準に、人間の生活行動の一切を帰属させる人間のことである。ついで宗教改革者たちの主張にもとづき、経済生活自身のうち一定の宗教的意味の存在することが承認されるようになり、これが近代資本主義を導くにいたつた主要精神的基礎であると指摘するのが、周知の Max Weber の見解である。^(註一)このようにして経済生活と社会諸思想とは切り離しがたいし、社会諸思想を経済諸理論から全く切り離しうるものとは、思えない。むしろそれらはたがいに融

け合い、結び合い、絡み合い、明示的にか暗黙にか、一体化されて主張されているのが普通である。経済学的知識の各部面に浸透して融け合い、融けこみ、これを規定し、制約し、色づけている特有な人間観・社会観・世界観などのこときにもとづくものが、経済理念または経済思想にほかならぬ。^(注1) 経済についての理論 (theory) または学説 (doctrine) の歴史は経済学説史 (Dogmengeschichte) であるが、経済における理念 (idea) または思想 (thought) にかかわるものとして経済思想史 (Ideengeschichte) が存在し、前者に劣らず重要であり、これを等閑視することはできない。経済学説史と経済思想史とを合わせたものが、もっとも広い意味における経済学史を構成する。

注1 Max Weber, Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus, 1904-5. (梶山力・大塚久雄訳『プロテスタントイスマの倫理と資本主義の精神』岩波文庫) Richard Henry Tawney, Religion and the Rise of Capitalism, 1926. (出口勇蔵・越智武臣訳、宗教と資本主義の興隆、岩波文庫) 大塚久雄著『宗教改革と近代社会』四訂版昭和三十九年。

注2 出口教授は、経済学と経済思想との二つの知識群が同時に成り立つことを指摘され、この区別の意義をとくに重視されている。その区別の基準を要約すると、——「この二つの概念は、対象の幅とそれに立ち向う主観の幅における相違にもとづいて生じる。……すなわち、第一に、科学としての経済学は社会生活のなから経済生活だけを抽出し他の生活をして、考察の対象とするに対して、経済思想は経済生活を中心におきながら、……ともかくも社会生活の一面といつてよいものなまでに、対象の幅を拡げる。第二に、……分析し綜合する機能を営む知性として対象にかかわるか、それとも、その知性を表面に出しながら、その知性をやどす人格として対象に関係するか、ここにちがいががある。……これらの知識群を比べてみる一つのことは、経済学においては……認識における多様性ないし『多』の側面をあらわし、経済思想の方は経済生活をば統一的なかたちで説くという意味から『一』の面をあらわしているといえる。」(『経済学史の本質と類型』経済論叢、第九三巻第一号、七七八ページ) 教授においては、「科学的認識にたずさわっている人の主観」が中心におかれて、そういう主観によって組立てられるものとしての経済思想に限定して、区別がなされているように思われる。すなわち経済学者であつて社会生活の他の面にまでわたり思考する人、したがって一人の人格として思想をもつことのできる科学者の経済生活を中心においた統一的综合的な知識の体系が経

濟思想として理解されることになる。(同上七ページ、一〇ページ注(3)など) わたくしもまた經濟思想を、それ自身一個の統一である人格が經濟生活にかかり会うにあたりもつようになる知識、したがって他の生活の部面にまで関連しての拡がりをもつものとみることには、教授におけると変りはない。けれどもここでは、わたくしはもっと広い受取り方をすることにした。それとは意識されずに抱かれ考えられているような通常さまざまな經濟意識・經濟觀のごとき、また宗敎人や芸術人などの非専門家によりに抱かれる經濟觀のごときまでも。つまりは經濟科學の認識にたゞさわる特定人の經濟思想だけではなく、素朴で幼稚で、日常的で非専門の者の思想であっても、その人格とのかかわりにおいて(人格とのかかわりであるから、当然に価値感情をとまなう。わたくしは、とくにこの価値感情に重点をおいて、これとの関連において經濟思想を以上では述べた。)抱かれるようになる他の社會生活とも關係をもつ經濟についての觀念であれば、そのうちに含めることにしたのである。その方が、一つの分科の學として經濟思想研究がとくに意圖される場合には、対象領域は拡がり、対象の内容も素材としては豊かに水々しく、したがって分科研究の意義も大いに高まってこようものと考えられるからである。わが国近世の經濟思想史の研究の場合には、日本に土着されて發展してきた諸思想にまで拡大されて考察はなされるべきであろう。また *homo economicus* という概念は、理念型としての一つの作業概念として用いられる他面では、そういう生き方、考え方、感じ方を、他の社會觀・人世觀と合わせて現實の社會生活の内部において生きてきた現實の人間人格や集團があり、それらが經濟についての一定の述べ方や見方をしてくているという事實そのものは、尊重されてよいのではないかと思われる。

四 經濟学史研究の意義

經濟学史はなぜに研究されねばならぬか。今日においてとくに学ばれねばならぬという現代的意義はどこにあるのか。こういう設問は一見無意味にみえる。がしかし、よく考えてみるとそうではない。經濟学史というものの本質理解にかかわりをもつ。經濟学史とはなにかということへの理解が深まるばかりか、どのように学ばれねばならぬかという

方法把握についても、目が開かれてくるからである。

経済学史という事実があるから学ぼうと思う。山があるから登りたいと思う。なぜに学ぶのか、どのように登るのかは、あとから考えてみることである。経済学史がなぜに学ばねばならないかという問にたいしては、このような答をすることができよう。人間がもつ好奇心のことをいうのである。存在への好奇心から、存在を学ぶ。しかし好奇心とは、なんであるか。なんのための、なんによる好奇心か。好奇心ということが実際には、人間が事物とのあいだにもつある種のかかわりを意味し、人間に本来的な関心の一面であることは、いうまでもなからう。それではどのような種類の関心であるか。どういう関心にもとづいて、人は経済学史を学びたいと思うようになるのであるか。

しかし人々が経済学史へと関心をもつようになるまえに、経済学史という事実がすでに存在し、しかもそうして経済学史という事実が存在するのに先立っては、経済学自身が存在しているのでなければならなかった。経済学があるので、経済学史もまたある。それでは経済学はどのようにその存在を開始し、どのようにして成り立つにいったか。それは経済学生成の問題である。これについては、相当に古い時代にまで、さか上ってみることができないではない。経済の事実についてなほどこかの関心を抱き、意味を見出し、記録したり、考えてみたりした人々が、古い昔からないではなかった。そういう人々の書き残した記録のごときを頼りにして、古い昔の経済思想について語ることはできる。けれどもそれでもって学としての経済学が始まったのではない。経済学というものを知っており、それを意識しての記録であったり、思考ではないのだから。学としての経済学の成立は、ずっと後代になってからのことである。近世、重商主義文献に現われる論議や主張の積み重ねのあいだに学としての経済についての思考は発達してゆき、知識の体系

としての経済学は、アダム・スミスにいたってようやく成就される。学としての経済学についての思考は、スミスに始まるとみなされてよい。スミスの後継者たちが、スミスの打ち立てた経済理論を精緻にし、拡大し、発展させ、それぞれの経済理論を打ち立て、これより経済学史の展開になる。経済学史についての科学的考察は、それより後においてのことといわなければならない。

もっとも学史的思考が、それまでに全然なかったという誤りになる。経済問題や経済的事実についての人々の関心が高まるにつれて、さまざまな理論や主張が現われ出る。重商主義の数々の論客は、その論争の過程において、先行の諸学者の論議や主張を参考にし、引き合いに出し、または再吟味を行ってきた。ここでも経済諸理論の生成に後続して、これら諸理論についての反省がなされている。思考は、みずからの前進のために、先行の諸理論を、いいかえればみずからによるみずからの理論を、さらにいいかえれば思考みずからの足跡を、反省し再吟味しなければならなかった。組織ある学的思考、すなわち経済学的知識の体系を初めて打ち出すことに成功したA・スミスが、また初めて組織ある学史的論述を行なっていることは不思議ではなからう。もとより経済学史的思考という自覚に立ってのものではないにしても。スミスの眼前には、重商主義や重農主義など、スミスの立場からみて批判されねばならぬ先行のいくつかの見解があった。そこからスミスは、さまざまな知識を汲みとり、学びとりながらも、批判し、それを越えて、それとは区別されるみずからの学的体系を打ち出そうと試みた。このような批判と超越の立場から、重商主義や重農主義の言説が、スミスによって論述し吟味されることになったのである。経済学的思考の端初は、経済学の成立に先立ち、すでに始まっていた。同様にして経済学史的思考の端初も、本来の経済学史の成立に先立ち始まっていたのではないのでなかった。経済学的思考がようやく始まり、発達してゆくにつれて、その思考みずからの足跡を振り返って確かめてみよう

する思考自身のための思考が、すなわち経済学史的思考の端初が早くも始まっていることに気づくのである。

けれどもまた経済学史的思考の端初というにすぎない。自覚され意図されての経済学史研究が始まっているのではなかった。経済学自身が成り立つことにおいて、自覚されての学的体系的思考が活動を始めるようになるのであって、経済学的思考活動の歴史が、経済学的思考自身のために、それみずからによって吟味し反省されるようになる。さきに、経済学はスミスにおいて自立的学として成立したと述べてきた。こうして自立的学として経済学が成り立つと、経済学のがわからこんどは、組織的に意図されての学的思考の活動が開始されることになる。スミスの経済学は、生まれ落ちたばかりのイギリス資本主義を問題とした。歴史的に地理的に特殊な資本主義経済を問題とする経済学でしかなかった。けれどもそうして自立的学としての経済学が成り立つてしまえば、経済学に特有の思考が自立して、みずからの本来の規定にそい、その欲するところに従い、活動を開始せざるをえないであろう。当面の資本主義には直接の関連はなくとも、およそ経済にかかわりをもつものであるならば、学としての思考であるかぎりにおいて、それへの志向をひかえることができなくなった。第一には、資本主義をさか上り、過去の経済関係にまで思考の対象は拡大されねばならない。そうして経済史という経済学的考察の新しい分野が開かれる。第二には、資本主義の現在に立ち、これを分析し批判し、その上で資本主義の未来を構想する。これはさまざまの経済政策論・改良思想・ユトローピア思想、または社会主義の諸思想になる。第三には、スミスにいたるまでの経済理論や思想の歴史的発展が、すでに成立した経済学の立場から、組織的に体系的に研究される。これは経済学前史の考察である。スミス以後の市民経済学の歴史も考察され、すなわち狭い意味での経済学史の研究である。二者を含めての広い意味での経済学史研究への領域が打ち開かれることになるであろう。^(註五) 学としての経済学史の研究は、このようにして学としての経済学的思考が成立し自立し、それに特有の活

動を開始し發展させ、みずからの思考活動の足跡をすらみずからの思考対象とするようになって始まる。経済学成立以後の経済理論はもちろんとして、それ以前の言説についてもまた組織的に体系的に研究しようとする固有の意味での経済学史研究の発足である。^(注1)

注一 学としての経済学的思考は、経済学的思考みずから思考の対象にすることができる。したがって学としての経済学が成立することによって打ち開かれる新しい研究の分野の第四として、経済学の認識論または方法論——もしこれを経済哲学というならば、経済哲学——のごときをあげることができよう。経済学史研究は、すでにこうした自己内還帰の思考の方向を示している。学史研究と経済哲学とは、内面において深く結びつかざるをえないのである。もっとも学として経済学が成り立つというときには、そこではすでに、学的体系といわれるに足るだけの程度においては、みずからについての自省の行なわれていることを前提とする。スミスにおいては、その『国富論』は、社会についてかれが志していたといわれる包括的体系の第四部に位置し、便宜の原則を、すなわち政治経済を問題とするものとされていた。同様の程度において、経済史・経済学史・政策論のごときに属する論述が与えられているのである。

注二 経済学史研究が、経済学の成立をまわっての形成であることは、出口教授において鋭く指摘されているところである。すなわち、経済学の第一次形成に続く第二次形成の段階が区別され、経済学史をその第二次形成における(b)の項目において位置づけられる(『経済学史の本質と類型』前掲書、五〇九ページ)。第一次形成というのは、「経済学が正常なかたちで成立し、科学界のなかで市民権を得るようになる」ときのそれであり、第二次形成というのは、第一次形成の成果の「反省」であり、「(b)歴史の立場で経済学の体系について反省を加える角度。ここにみえる成果がすなわち経済学史である。」わたくしの場合は、これを、学として成立し自立化されたことにおいて生じる経済学的思考の内包的および外延的展開というように考えていった。したがって第二次形成といわれるものにおいて考えられる内容や方向において、若干のずれがないわけではない。

ところで経済学的思考が経済学史研究にまで対象を拡大しようと思うのは、なぜであるか。経済学史という事実がそこにあるからであるか。学的思考であるかぎりにおいては、研究対象の肥大にともない、思考の分野が自然と広げられ

るといえば、いえようが、経済学史の事実にまでそれが拡大されねばならぬ理由はどこにあるか。学的思考というものも、いってみれば好奇心に関係をもつ。とにかく知りたい、分りたい。経済学史という事実があるから知りたいと思う。こうして経済学史は経済学的思考の内的必然にもとづき体系的に学ばれるようになったのであるか。そういう点のあることも否定できぬように思われる。人間はホモ・サピエンスであり、知的に貪欲きわまりない存在であるから。人々が経済というものについてどのように考えてきたかを学んでみたいと、経済学的思考は思うようになる。それを学ぶことは確かに楽しい。面白くて面白くてかなわない。経済学史家がそのように思って学んではいけないということはない。人間性の本質に根ざす満足であるからだ。好奇心に発する研究から意図しない発見に導かれることがある。発見といい、創造といい、企んでできるものとは限らない。けれどもそうはいいいながら、現在に生きて学び考えるわれわれである。好奇心からのみ生じた研究にみえる場合にも、単純な好奇心を越えて、社会的人間の好奇心であり、さらに現在に生きて学ぶ人間がもつ歴史的に規定された好奇心以外ではありえない。しかもその好奇心は、経済学体系の確立後の好奇心であるからには、体系的に組織的に働く。現在の経済学的思考においての理論的に体系的な好奇心といいかえてよからう。実のところ、現在にあつての経済学的思考自身が、もともとみずからの活動を完うするために、経済学史的思考を必要とするのであった。好奇心どころのことではない。経済学的思考自身のために、その足跡が吟味・検討されねばならぬのである。

学としての経済学は、みずからが学としての経済学であらねばならぬ必然から、自分自身にとってかえり、自分自身を吟味し検討しようとする。こういう経済学的思考における自己内還帰の活動は、経済学における認識論または方法論ということができよう。大まかにいって経済哲学なる研究分野を形づくる。経済哲学の研究のために、経済学の歴史的

航跡のあとづけと吟味が、いいかえれば、学史的研究とそれに特有な思考角度とが必要とされることは、いうまでもなからう。学史研究には、そういうった経済学研究にとっての価値がある。しかし価値は、それだけのことではないようだ。過去の吟味を媒介として、現在の経済学的思考にとっての創造の未来が切り開かれるということが、重要である。

先行の諸理論の検討や吟味のごときが、経済理論の新しい形成にとっての契機・媒介となることは、さきにもてきた。重商主義・重農主義理論の吟味を通じて、スミスの経済学体系は打ち立てられた。リカードは、スミスから学びながらも、他方その後の経済の発展や事情を検討しつつ、スミス経済学を深め、かつおし拡げた。過去の諸思想の吟味や点検が、現在を解明し、進んでは未来を構想し打開するための思考上の手掛りとされる。経済上の問題や存在は、すぐれて歴史的に規定されているものであった。歴史的に生成してきて、現在があり、現在にはさらに未来へと歴史的に展開されねばならない。過去においての問題や事実がどのようなものであり、どのように取り扱われてきたかを検討することを通じて、現在の事実や問題は正しく把握され、かつ未来への過誤なき見透しが開かれうる。みずからの足跡をふりかえり、みずからを覚り、自得し、そのことを通じて経済学的思考は、みずからを一步おし進めることができる。振りかえることが前進になる。自省することによってみずからが開かれる。理論形成に際しての契機となつて、経済学史的思考は経済学自身のために働く。単に過去の思考を振り返り、掘りかえして見るだけのことには止まっていけない。過去を掘りかえすかみえる思考自身が、実は現在にあっての経済学的思考以外ではなかった。現在の経済学的思考がみずからを振り返り、歴史的に自省し自得しながら、現在にあってのみずからの思考活動をおし進める。こうして現在の経済学研究にとって経済学史の研究は欠かせない。経済理論形成のための契機となり、媒介として、それは働く。経済学史の研究は、経済学的思考活動の一部面であり、とくに歴史的思考であるというその特質を通じて、それ自

身歴史的に発展してやまない経済学的思考の自己形成の歴史的過程に参加するという今日的な意義をもつものであった。

こうして現在の経済学的思考が行なう現在にあつての経済学史研究であるとするならば、経済学史研究もまた現在が次の現在に移るにつれて、移り変らざるをえないであろう。次々の現在へと不断に動いてやまないのが、人間の生活であり、およびそれにもなう人間の思考活動であるといつてもよからう。人間の思考は、絶えず移りゆく現在にいて、その現在の問題に当面し、それについての思考を試みる。そういう思考の活動は、歴史的思考の面を当然にもち、またそうして歴史的思考の面をもつということが、思考自身のためにも不可欠である。こうして不断に新たな経済問題に人が当面し取組むたびごとに、経済学史的思考は呼び出される。呼び出されると、その現在にあつて、そこから過去の経済学的思考の足跡を振り返って、見直す。歴史は不断の自己形成の過程であつた。経済学的思考は、ときどきの現在にあつてそれを振り返る経済学史的思考によつて、絶えず新しく見直され、書き改められながら、自分自身の現在を未来へと一歩おし進めてゆく。歴史が不断の現在において不断に書き改められざるをえないということは、本来自己形成的な歴史的過程それ自身の本質に由来するものであつて、また同じ本質に由来する歴史的思考活動それ自身に備わる現代的意義に負うものといふことができる。^(注一)

注一 現在は過去からの現在であり、現在のうちに過去はあるから、過去は現在において現在にたいし訴える。同様にして、現在からの未来であり、未来にいたる現在であるから、未来が現在に呼びかける。そういう現在が、刻々、現在をききみながら時間を進む。歴史の現実とは、そういうものだ。したがつて歴史的認識は、過去と現在との対話であるばかりでなしに、未来と現在との対話でもある。歴史が現在の時点で、絶えず見直され、書き直されるといふのは、このことによる。カアは「過去と未来との対話」ということをいつている。「過去が未来に光を投げ、未来が過去に光を投げるといふのは、歴史の理由づけであると同時

に歴史の説明なのである。「未来の理解が進んで初めて、過去を取り扱う歴史家は、客観性に近づくことができる。」歴史とは過去の諸事件としたいに現われてくる未来の諸目的とのあいだの対話と呼ぶべきであった。」(E. H. Carr, *What is History?* 1962, London, pp. 117-8. 清水樂太郎訳、岩波新書、一九六二年、一八二―四ページ)

経済学史的思考は、現在にいて現在にとり組まざるをえない現在の経済学的思考においてのことである。したがって、つねに新たに見直し書き直すとはいうものの、その現在においての経済学的思考による規定をうけねばならない。経済学的思考というのが、すでにときどきの社会における組織・集団・経済諸事情のごときにより制約されることは、さきに述べた。それはイデオロギイとしての性格をもつ。それとまさに同じ理由にもとづいて、経済学的思考の歴史的側面として行なわれる経済学史研究が、歴史的に社会的な規定をうけとらざるをえないということは、当然である。経済学史研究もまたイデオロギイ性をまぬがれない。それぞれの社会や集団が、それぞれのときに、それぞれの経済学史をもって差支えない。ときどきの経済学的研究があるとともに、そのときどきにおいてのそれぞれの経済学史研究が成り立ちうる。社会的に歴史的に規定される個別性・相対性ということが、実は言説の具体性・現実性の意味であることは、さきに述べておいたところである。(一九六六・二・三)